

平成 18 年度  
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えてください。

- (1) 役員をシタイする。
- (2) 寺からおキヨウが聞こえる。
- (3) シコウ力を高める。
- (4) 家族リヨコウに出かける。
- (5) 医者をココロザす。
- (6) あの方は誠実な人だ。
- (7) ある会社の専属歌手。
- (8) 巻末の記録を見る。
- (9) 腹筋をきたえる。
- (10) 犬を草原に放つ。

□ 次の(1)～(10)のことはA～Eのどれと関連がありますか、記号で答えてください。

- |          |           |         |          |
|----------|-----------|---------|----------|
| (1) きりかぶ | (2) くるぶし  | (3) かもい | (4) さみだれ |
| (5) おから  | (6) こがらし  | (7) こずえ | (8) なんと  |
| (9) はきだし | (10) こめかみ |         |          |

A 食品      B 天候      C 身体      D 樹木      E 建築

③ 次の文章を読んで後の問いに答えてください。

A エジプトの王朝にも文字は生まれました。それは「神聖なる文字」という意味で、「ヒエログリフ」と呼ばれます。古代の文字は、神々との行き来をうながす方法として生まれたのにちがいません。ただ、その「ヒエログリフ」は、いまは滅びてしまいました。「シユメール文字」も「線刻文字」もまた特定の言語学者や歴史学者の研究対象として重んぜられるよりほか、もはや世界の誰一人にも用いられることのない文字です。それを用いて話されることも書かれることもなくなってしまった、それらの文字は、すでに ① 屍の文字というべきです。

B 漢字はといえば、ほぼ三三〇〇年にもわたって生きつづけてきました。しかも、それを生んだ ② だけのことに限らず、この日本の私たちの生活のうちになお漢字は息づいています。漢字ほど時間を超えて生命力をもちつづけた文字はどこにもありません。

C 漢字の世界は、おのずから秩序をもつ世界として、私たちの「物語」のうちに紡がれ、語られてゆかねばなりません。漢字をそれぞれ切り離して、その一字一字を孤立したものとしてみれば、その漢字は、あたかも星座の「物語」から追放された、さびしい星屑の一塊にとどまっています。そのことはまた、漢字がその初めから形成していた、規律あるつながりと、まとまりをもつ世界をずたずたに切り裂いてしまう結果につながりかねません。

D 漢字の初めの世界に貫かれていた規律や秩序について、当時の人々は、それを分  
かりきったこととして、ごく自然のうちに受け入れていたことでしょう。③ そのような感じ方や考え方をすっかり失ってしまった私たちは、その一字一字をもつばら単独の記号として、慌ただしく記憶することのみを、いま強いられているかのように思われます。もう三三〇〇年もはるかに隔たった中国の人々の、その感じ方や考え方をそのままにとりもどすことは、もちろん困難をきわめることです。しかしとり

もどすことはかなわぬまでも、その古代の人々の漢字に寄せた思いの深さを丹念に  
手探りしてゆくことのない限り、漢字の世界はもう二どと私たちの眼前に、その初  
めの姿を開示することなどないのではないかと、おそれもするのです。

E 私たちは、古代の中国の社会や生活のほんとうのありさまを追求してゆくとともに、  
④漢字の世界に展開した、その初めの「物語」を再び、私たち自身の「物語」と  
して語ってゆく課題を背負っているように思われます。

(山本史也「神さまがくれた漢字たち」)

問一 〜〜〜線aと同じような意味の言葉を本文中の〜〜〜線b〜dの中から選び、記号で答えてください。

問二 ——線①について

I 「屍の文字」とはどのような文字ですか、二十字で本文よりぬき出して答えてください。

II 「屍の文字」の例を本文より一つ、答えてください。

問三 ——線②「それ」の示すものを文中の言葉で答えてください。

問四 空らん  に入る国名を答えてください。

問五 〜〜〜線e 「結果」と反対の意味の言葉を答えてください。

問六 Cの段落にある比喩表現の部分を、二十五字以内で探し、最初と最後の五字ずつをぬき出して答えてください。

問七 ——線③「そのような感じ方や考え方」とは、具体的にどのようなことですか、説明してください。

問八 ——線④とありますが、ここでいう「課題」の内容として正しいものをつつ次から選び、記号で答えてください。

ア、漢字を記号として記憶し、使い続けていく。

イ、今使っていない古代の文字を研究し、これから使える文字にする。

ウ、漢字が作られた時の規律を理解し、のちの世に伝えていく。

エ、中国の歴史を調べ、漢字ができた起源を明らかにする。

四 次の文章を読んで後の問いに答えてください。

土間の壁かべに、じいの消防用の長半纏ながはんてんがかけてある。※ 満吉まんきちはそれをひっかけた。これで、火の粉が降りかかっても平気である。

走りだそうとする満吉の手を、ひではつかまえた。

「おまえという子は、だめだいうても聞かねえだかんの……。ちょい待ちなされや」

ひでは、携帯用の竹筒たけづつに水を入れると、手わたしていった。

「火事場では体が乾くけんど、飲み水がなかるうが。いいかな、決して無理しねえで、けんぞう健造けんぞうさは材木の仕入れに出張しゅつちやうだかんの、ヤエのところも行ってやらっしえ」

健造は、親方を助けて職人をたばねる人。ヤエはその娘むすめで、今夜はひとりで留守番るすばんのはずだった。

※ 半鐘はんしょうはまだ鳴りつつづけている。

満吉は走った。じいや兄の反対を無視して出てきたが、母が自分の気持ち①をわかつてくれたと思うと体が軽かった。松林をぬけたとたん、満吉は「あっ」と立ちどまった。

〈中略〉

火は、村を総なめにする勢いであつた。

——こりゃあ、どうにもなんねえ。村は全滅ぜんめつじゃねえか。

すれちがいに、荷物をしよつた村人が、次つぎと火を逃のがれて坂上へのほつてくる。

近くの村むらから応援おうえんにかけつけた消防団が、ポンプで消火にあたっていたが、火は衰おとろえない。満吉は二度三度、ホースで水をかけてもらい、体を冷やしては走った。

だが、坂の下は火の海で、道にも火炎かえんが流れてくる。健造の家はあきらめるしかない。

——ヤエはどうしたんか。まさか、この大火の中なかにいるはずねえだが……。

避難ひなんしてくる人の群れは、あらかた通りすぎた。目をこらして坂下をたしかめた、

そのときだった。箱をかかえた小柄こがらな女が、**A**と、それでも必死に坂をのぼつてくる。頭からかぶっているのは、とてらのようだ。※

——もしかすつと……。

吹きつける火の粉と煙の嵐に追われて、女はむせびながらやってくる。

「おーい！ ヤエでねえのかあ」

満吉はかけおいた。

熱い！

ごんごん燃えさかる炎が近づき、**B**と熱風が吹きつけた。

女はうずくまった。満吉も煙にむせた。息ができない。目もあけられない。

女のどてらが煙をあげている。満吉はどてらをはいで水にひたした。

「ヤエ、やつぱり、ヤエでねえか！」

ヤエはひとつ年下の幼なじみだ。いつもなら気恥ずかしいが、満吉は少女の体をかかえ起こした。だが、ヤエは**C**と力がぬけていた。

「ヤエ、おめえは強い女子だに。しつかりせい」

倒れても、それでもヤエは、木箱だけはしつかり抱いていた。

満吉はヤエの箱をうぼうようにして立つと、あまりの重さによろけた。ふつうより

大きい大工の道具箱である。その重さにおどろいた。

「ヤエ、箱は捨てる。こんな重いもの持っておいたらおいねえ、逃げおくれる」

どなるようにいっても、ヤエは首をふった。そして、自分が持つんだと手を出した。

いつもの活発なヤエでない。大きな目もうすくしかあけられず、声も出ないのだ。

「よし、おれが持ってやるけん、がんばって歩けよ」

ヤエは立ちあがりかけて、**D**とひざを折った。

「おれの肩につかまれ」

ぐずぐずしていたら、炎のつむじ風にまきこまれる。

頭の上を、屋根板や戸板が燃えながら、さかんとはされていく。その一枚の火の板がヤエにかぶさった。ヤエのどてらが燃えだした。満吉は板をけって、どてら水を樽にひたしてかぶらせた。ヤエの髪や着物についた火も消した。

重い木箱を左手にかかえ、右腕はくずれそうなヤエを支えて坂をのぼった。

この坂の左右には、ムカデの脚のようにならんだ漁師長屋が幾棟もあるが、間もなく燃えつきるだろう。住民は避難したあとのようだが、ここさえぬけて左に折れれば、人家からはなれた弁天の洞穴への道になる。その角さえ曲がれば……。

息がつまる。熱い！

② 次の水樽でも水をあびた。

走れば五分とかからないのに、その曲がり角まで、なんとつらい道のりだろう。

熱い煙が、ふたりをつつみこみ逃すまいとするかのようなうだ。

木箱は、かかえなおそうとしても、重くてずりおちてくる。満吉は自分でも倒れそうだが、ヤエを支える力もぬけない。歯を食いしばり、渾身の力をふりしぼってのぼった。

だが、……息ができない。十二歳の力はつきて、腰を落とした。

そのとき、ころがってきた背負いかごが目に入った。

「や、やつ、こりゃあ神さまのくだされ物か」

ありがてえ。助かったと、竹あみのかごに木箱を入れて背負い、ううむ、と立ちあがった。力がよみがえった。ふたたびヤエをかかえるようにして坂をのぼった。

「もう少し……、もう少しだ、ヤエ！」

しかし、火の   は速かった。ふたりは完全に火の粉と灰の風にとざされ、煙のなかだった。

空気も吸えない。

この熱さでは、……いよいよ、おれが燃えるのか！

背中のかごが燃えだした。急いで箱をとり出してかごを放りすてたが、その瞬間、満吉は咳きこんで立てなくなった。

窮地だ。体が、動かない。

なにくそ、なにくそと、立って足をふみだしたが、しだいに力は失われていく。

「ここで負けてたまるけえ！」

だが、箱が手からはなれた。そのとき、ヤエが箱をかかえて立った。その姿は鬼女のごとくすさまじく、満吉も必死ではうように歩きました。……が、何につまずいたか、前のめりに倒れた。腕の片方であやうく体を支えた。その上にヤエがくずれてきた。

熱い！ まわりが燃えている。

煙にむせた。

満吉の脳裏に、出かけのときの母の顔が浮かんだ。<sup>③</sup>

「おっかあ、おれ……」

咳きこんだ。どうにもならない。息ができない。

……力つきたか。

……あ、あ、焼かれる！

……熱い！

「ヤエ、おめえは、がんばれ！」

やっといった。そのとき声がした。

「ヤエじゃねえかよう、おっ、ほんもおったか……」

遠のきかけた意識のなかで、なつかしい声に聞こえた。

「あっ、健造さ……」

ヤエの父だ、亀萬の職人をたばねる男だった。かけつけてきたのか？ いや、すぐにとんでこられる出先ではなかったはずだ。

しかし、たしかに健造だった。根っこのようなごっつい大きな手が、満吉を起こした。ふたりは健造に助けられて、どうにか無事に弁天の岩場にたどりついた。洞穴のなかは人と荷物で入れないが、やっと安心して腰がおろせた。

少し休むと、満吉は元気をとりもどした。

「健造さあ、おれ、死ぬまで忘れねえ。助けてもらうて……」

「とんでもねえ、ほんは、ヤエのいのちの恩人です。おれは、材木の仕入れで、え

え樹を見つけたが話がうまくいかねえ。それどころか、何か胸騒ぎがしてならねえ。それで、帰ってきちまったが、よかった。このありさまだよ」

ヤエも息を吹き返したように、黒くすすけた顔に血の気がさしてきた。

健造は木箱をあけて、「なんだあ、おい、ヤエ……」と、だけいうと、ことばを失った。箱の中には、船大工にとって、いのち同様にたいせつな道具がつまっていた。④

それを手にして、

「ヤエ、おめえ……、おめえは……」

泣かないはずの男が、とめどなくほおに涙を流した。

「ほん、ありがてえ。おれんちは焼けてしまったけん、この道具さえありゃあ仕事ができるわ。くじけず立ちあがれと、ヤエは教えてくれたんじゃなあ。……だがな、ヤエ、おめえは、ほんとに大バカもんよ。この道具なんかより、おめえのほうが、もつと、もつと、おれには大事な宝なんじゃに」

(岡崎ひでたか「鬼が瀬物語―魔の海に炎たつ」)

※長半纏……和風の上着の一種。

※半鐘……小形のつりがね。火事などを知らせる時に使う。

※どてら……和風の防寒用の上着の一種。

※長屋……数戸の家を一棟に建てつらねた家。

問一 —— 線①「自分の気持ち」とは、どんな気持ちですか。正しいものを次から一つ選び、記号で答えてください。

ア、火事の様子が気になって、早く見に行きたい気持ち。

イ、母の手伝いがいやで逃げ出したい気持ち。

ウ、じいや兄に対して反発する気持ち。

エ、一刻も早く火事場に手伝いにかけてほしい気持ち。

問二 空らん  A  D に入る言葉を次から選び、記号で答えてください。

ア、ごうごう      イ、すたすた      ウ、よろよろ

エ、がくつ      オ、くつきり      カ、くにやり

問三 —— 線②「次の水樽でも水をあびた」とありますが、何のために水を浴びるのか、説明してください。

問四 空らん  に入る言葉を次から選び、記号で答えてください。

ア、頭      イ、足      ウ、腰      エ、目

問五 —— 線③「母の顔が浮かんだ」のはなぜですか。説明として正しいものを二つ次から選び、記号で答えてください。

ア、母の心配どおりになり、解決策を思い出していたから。

イ、いつも自分を理解してくれた母に申し訳ないと思ったから。

ウ、母の身に危険がせまっている予感がしたから。

エ、もうこれで母とも会えないと思ったから。

オ、何でも力になってくれる母が助けに来てくれると信じていたから。

問六 〰〰〰線 a 「胸騒ぎ」の意味を答えてください。

問七 〰〰〰線 ④ 「ことばを失った」のはなぜですか、説明してください。